



# 岐蘇林多

- 會津地方に於ける漆樹栽培に就て
- 航空機の話
- 杉材雜觀
- なめくぢが喜ぶ
- 明けゆく道
- 修學旅行記
- 折にふれて
- 夕のかなしみ
- 友への叫び
- 記念事業融金申込報告
- 島内先生謝恩金
- 會員動靜

大正十年七月廿五日 第四百一十一號 每五廿月日發行 治明四年六月十四日 (第三種郵便物認可)

## 會津地方に於ける漆樹栽培に就て

(承前) 上條生

第三 種子採取及精撰  
 種子の採取 十月下旬より十一月初旬に至り落葉して種實の外皮淡黄色を呈するに至り採取す時季少しく後る、も甚しき支障あるを見ず採取するには方言木の實取鎌と稱する土方に刃を附せる刃渡り三寸程の灣曲せる鎌に長さ二間位の柄を附し又は一尺柄の柄を附して適宜の竹竿に結び付けたるものを使用して結實せる房の根本を上方に突きて地上に落下せしめて拾ひ集む  
 種子の精撰 拾ひ集めたる房を巾一尺長三尺位の板の中央を高く灣曲せしめて鐵線を張り兩端を更に鐵線にて固定したる扱落板に擦り附けて粒となし更に粒間に介在せる塵芥を除去す、塵芥を除きたる種實は更に之を木臼に入れ徐かにひきて外皮を剝離し之を万石及唐箕にかけて外皮及塵芥秕等を除き精撰を終るものとす  
 大正九年十一月中喜多方小林區署に於て耶麻郡北山村字鷺養塲國有林内漆母樹林より採取したる實験によれば漆種子の重量左の如し但し結實の豊凶により多少の差異あるは勿論なり  
 房の儘秤量したるもの一貫目より外殼附着の種子六升三合を得  
 外殼附着の儘の一升の重量 百四十匁

外殼を除去したるもの、全二百八十六匁  
 會津藩に於て標準として定められたるもの次の如し  
 房木實 一貫目 粒となし 六升五合  
 粒實 一升 百二十五匁  
 全 粒數六千九百五十四粒蠟粉六合種子 四合

種子の蠟分除去 精撰したる種子は精撰後直に又は播種の間際に於て桶に入れ木灰苛性曹達石鹼液又は、茨汁の何れかを加へ温湯を注ぎて洗滌し蠟分を除去せざるべからず然らざれば播種後温氣を吸収し難くして發芽不揃となり一年或は二年を経て發芽するものあるを見る洗滌に際し浮きたる秕を除く  
 第四 種子の貯藏及其價格  
 漆種子に乾燥を嫌ふを以て袋又は、吠に入れ其儘土藏等に貯ふるも可なれ共砂に混じて貯ふるを最も可とするが如し  
 昔時にありては多くは之を竹筴に入れて尿水中に浸し置き翌春之を引揚げ洗ひたる上木皮を混じて播種したるものなり之種子の濕潤と蠟分除去とを兼ねたるものにして自然の理法に適へるものなり  
 價格は年によりて同じからざること勿論なるも喜多方小林區署に於て大正十年一月附近生産地より直接購入したるものは種子の外皮を除き精撰したるものにして蠟分を除き去せずして耶麻郡駒形村常世苗圃納の價格一升十五匁なるが之を種子商人の手より購

入するものごとすれば蠟分を除去したるもの一升約五十錢内外なり

第五 苗木の養成方法

第一項 播種による仕立法  
種子の浸水 蠟分を除きたる種子は播種前一週間乃至十日位水又は微温湯に浸水する要す

苗圃 苗圃は地味肥沃稍温氣ある日當りよき砂質壤土を可とす、秋季耕鋤して施肥しおき翌春再び之を耕耘して巾二尺五寸高さ六寸位に仕上げる様に床を作り人糞尿を施し土を覆ひて踏み固の八十八夜前後に播種す

播種量は床地一坪に付三合乃至五六合を普通とするも三四合を適度とす、撒蒔とし細土を五分位篩ひかけ一本並に藁を覆ひ乾燥せざる様時々稀薄なる未柑汁を漉くこと凡三週間にし發芽するに至る

苗木の撫育 發芽するを見て藁を除き日覆をなし時々雜草を除き稀薄なる人糞尿を施し秋彼岸過に至りて日覆を除くものとす普通霜除は之を要せざるが如し、翌春發芽前に列間六寸苗間五寸位に床替を行ひ除草施肥をなす時は二年目秋又は三年目の春山行苗となすことを得べし雄木は雌木に比し生育頗る速かにして鬚根少し葉は雄木は細長にして雌木は厚く圓形なり

第二項 分根による仕立法  
根分による時は雌雄思ひの儘の苗木を得べく且長速かなり然れ共老齡に及り其の

生長播種のものに稍劣ると云ふ根分けによりて苗木を仕立つるには春秋彼岸前後に周圍九分乃至一寸六分位の根を長五寸位に截り列間六寸苗間五寸位を距て、稍斜に之を伏せ細土を二寸位覆ひて踏み固め時々除草をなし少量の肥料を與ふる時は春伏せのものはその年の秋、秋伏せのものは翌年の秋に至り長さ二尺位の山竹苗を得べし成長遅れたるものは床替をなすを要す

第六 山地植栽の適地及時季方法

山地植栽の適地 漆は元來支那より移植傳來したるものにして郷土は植物帶上温帯に屬す、即ち本州中央より東北地方に適し殊に會津地方は其適地たる瀋陽時代の保護獎勵と相俟て漆樹生産地として古來最も有名なりし地方にして往時は畑地に間作し又は農地とするに適せざる畦畔河畔堤防敷等に植栽せられたるものなり一般に顯氣適當にして砂質壤土又は砂礫を混ぜる埴土の透水性良き土地に適し日當りよき緩斜地の中腹以下の低地には良く生育す概して濕地に植栽せるものは乾燥地に植栽せるものより生長速かなりと雖も漆液は水分を含むこと多く品質稍劣り南面の透水性良き適地に生育したるものは漆液の産量多く其品質亦土等なりとす

植栽時季 植付の時季發芽前を可なりとす秋季落葉後にするも可なれども寒害の爲枯死するものあるを免れず

植栽方法 簡單なる開墾をなす二三年の

間大小豆野菜類等を栽培して後植付くるを可とす前作は植栽後の手入費を軽減する故可成此方法に依るを得策とす

前年の秋に於て廣さ方二尺乃至三尺深さ二尺位を堀り起し土壌を細碎して厩肥等を施し薄く土を覆ひおき翌春植付くる時は生育頗る良好なるものなり昔時は一駄木又は駄木と稱し厩肥を一駄或は二駄施したるものなりと云ふ植付に對する注意は一般苗木に同じ植付の際の植穴は直徑一尺五寸深さ一尺五寸位とし一人一日の切程六十個位を普通とす一町歩に對する植栽本数は二千五百乃至四千本位を適當とす第六章第一記筋述の如く短期間に代採更新する場合に於ては比較的密植を有利とするが如し

第七 間作

前の如く開墾して植付けたるものは植付後四五年の間は大小豆野菜の類を栽培することを得べく手入を兼ねて得策なるものとす

第八 植付後の手入撫育

開墾して植付けたるものは植付後四五年間は間作を行ひ耕耘するを以て其後は手入を要せず開墾を爲さずして山地に直に植付けたるものは毎年一回雜草を刈拂ひ蔓類の除去等五六回繰返すを要す、施肥は二三年の内少量の厩肥人糞尿油粕等を與ふるを可とす別共々に施肥せざるを普通とす、倒木起し害虫の驅除等時に應じて施行するを要することを勿論なり適地に植栽したるものは生育速なる樹性は陽樹なる故幼時日蔭に堪

航空機の話

荒 木  
人類の創始鴻荒の時代より人は水陸に於けるが如く天空を往來する方法を求め既に亞細亞古代の遺跡には人の飛行圖を彫刻せる遺物を存し又「カイロス」の神話は昔く人の知る所にして紀元前四百年の頃「タンメツーム」の「アルキマス」は鳩飛行機を創造したとの説あり其他魔術家「シモン」及「レナルドダウインチ」等史譚中に飛行を企てたるものの遺名を存するもの頗る多し而も往昔の飛行計畫は何れも成功の跡を存したるものなく甚だしきは最後の悲劇僅かに後世に傳はれたるのみ而して何れの計畫家も斯道の問題を眞に了解したるものなく毫も之に關する難問を解釋するの智識を具備せず且各自孤立して自家の考案のみを固守し先輩遺業を蔑視したるが故に中古の企劃者に比し一步も進歩の跡を認めず加之何れも鳥類の飛翔に模倣して人工的翅翼を作らんとする單純なる考案を起し其翅翼の形狀廣狹を餘度せず翼を振ふの方法を考察せず又之に要する原動力を研究せざりき十七世紀及十八世紀の頃「キヌスマオ」及「ラナ」と呼べる人あり其に球の全部或は一部を空虚にしアルキメデスの原理に依り空中に飛ばせんとす計畫をなしたりとの傳記あるも

航空機の話

荒 木

之を實行したるの形跡を存せず人類が古來計畫したる所と全然別異にして且鳥類に於けると異なる方法に依り空中に飛揚する最初の方法を案出して飛行端緒を開きたる先驅者を「ジョセフモンゴルフィエ」及「ステイエンヌモンゴルフィエ」兄弟の二佛人とす其最初の試験は世に普く知らる、所にして千七百八十三年「アンノネ」市に於て小形の紙製球に暖氣を入れて昇騰せしめたり而して此の試験は大いに世に宣傳せらる、に至れり、其の後數月にして理學者「チャール」なるもの巴里に於て水素瓦斯を氣球に填充して昇騰せしむ、是れと同時に「ピラートルドロジー」及「カルランド」侯爵は暖氣球に乗じ初めて放揚氣球の飛揚をなし次に水素瓦斯を填充して二回の試乗を行ひ「モンゴルフィエ」兄弟も之に參加せり茲に於て幾千年來人類が空中に昇騰せんとすの渴望實現し世人をして益々これが研究に意を傾注せしむるに至れり然れ共當時の氣球は風力の翻弄する所となり一度浮揚するや復何邊に赴くかを知らざりしも之が指導たるや甚しく困難ならざる可きを察し近く其の成果を得べしと期待したりき否るに氣球指導を目的として數多の計畫行はれたるも「キムエニー」將軍の計畫の外何れも全然早敷に等しく其の計畫が毫も問題を決するに足るの智識を有せざりし事を證して餘あり「キムエニー」將軍の計畫は甚だ着實なりしも遂に決行するに至らずして止みたり茲

に於てか世人は指導計畫の一切不成功なるべきを億斷して氣球は無用の長物にして僅かに祭事潤飾たるに過ぎずと看過され殆んど學者及び公衆の之を顧みるものなきに至れり遂に二百有餘年を経過しぬ然れ共此の間全然研究が停止せられたるに非ずして軍事上にも暫々應用せられたり即ち佛國第一共和時代に於て「フルンヌ」の戦役及「マインス」の攻圍に際し之を使用して大いに裨益たり一八四九年頃埃軍の「ヴェネツィア」を攻圍するや放揚氣球を以て爆彈投下を試みたりも其の効を奏せざりき其の後十年を経て佛軍の伊太利に侵入するや緊留氣球を應用したりしが其の結果は殆んど無効に終れり又米國南北戰爭中氣球を以て偵察の用に供し多少の効果ありしもの如し一八七一年及一八七二年の巴里攻圍中市内と市外との交通用として暫々氣球を利用せり此の間又重體航空機の研究も漸次其の歩を進めたり即ち一八〇九年英人「カエレ」が一雜誌に風式飛行機に關する論文を掲載せるを嚆矢となしたるも當時は世人の注意を惹くに至らず、其後一八七四年佛人「ペノー」氏其理論を敷衍して現今に於ける飛行機の學理を大成せり是れと相前後して英、佛、獨、米等に於ても小模型の飛行を實驗するもの續出するに至れり米人「ラングレイ」氏は一八八七年より氣體動力學の研究に着手し孜孜として勉め基本原理を發見するに至れり氏は又「ウリアムソン」と

へす冠の破開比較的速なりとす 續

協力して有名なる廻轉臺を作製し傾斜面に及ぼす空氣抗力を科學的に説明し空氣抗力係數Kの値を研究し其の先輩よりも一層正確なる結果を得又受壓面の壓力中心の變化「アマベクトレンヨ」の影響等重要事項を發見したる氏の研究は平面に由りて行はれしが故に今日の飛行機設計には直接適用せらるゝ部分僅かなり、氏と殆んど同時に佛人「ルナル」大佐は佛國陸軍省より航空行研究委員を任命せられ航空機の研究に従事すること十有餘年一八八四年及一八八五年に亘り指導氣球「ラフランス」號を設計飛行機揚し一時世上に賞讃を博せしより氏の名聲遠る空中航行が此の時初めて實現せられ航空術の一新紀元を開きたり氏は又一八八八年實驗氣球動力學なる著書を出し飛行機の設計を始め先づ謹謨動力の模型を作り實驗用とせしも飛行距離の短少なると不規則なることは實地研究をなすに足らざりき其の後動力に蒸氣或は壓縮空氣及び酸素瓦斯を用ひて實驗せるも發動機の不完全にして必要なる牽引力を生ぜしむること能はざりしが爲失敗に歸したりと雖も毫も屈する事なく漸次に改良を施し終に一八九六年一馬力の蒸氣機械を裝備し全重力二十七噸を有する模型を製作し數回の飛揚を試み、最大距離34哩を得るに至れり、米國政府は之を聞き五萬弗を提供して蒸氣機械を有する實物の製作をなさしめ遂に一九〇三年「シーエムマリー」氏が試乗を試みたこと推進

裝置に故障を生じたために平衡を失し海中に墜落し操縦者は救助せられしも機體は粉碎し其の用をなさざるに至れり  
獨逸の「マントリエンター」氏は回面に及ぼす空氣抗力を研究して之を世に公にし後進研究者に多大便宜を與へたるのみならず滑走機を作製し飛行機の安全に關する研究をなし飛行術上に多大の貢獻をなしたり氏は即ち風式飛行機の飛揚問題は發動機の重量軽減せらるゝ時に自然解決せらる可きも反之飛行機の安定は世人の想像以上頗る困難なることに着目し先づ發動機を備へざる飛行機を保持して丘陵上より風に向ひた走り下り空氣壓力に依りて空中に浮揚し後脚を動かして重心位置を正規しつゝ、平衡を保ち成る可く長く空中に止る事を勉むるに在り如斯すること二千餘回にして大に安定に就き會得する所あり更に發動機を附し完全なる飛行機の實驗に移らんとしたる時期に到達せしが不幸一八九六年空中滑走間墜落即死せり  
之に次ぎ米國「イレー」鐵道會社の機關長として有名なる「マクタープ、チャニユー」氏は熱心に飛行機を研究し一八九四年飛行機の發達なる書を著し其の發達の歴史を詳細に説明せり  
氏は研究の結果次の如き斷定を下せり曰く安定飛行は重要な事にして人の務動に由りて安定を得るよりも寧ろ支持面の壓力を變更するの簡單なるに如かずと主張し一八



杉材雜觀

クリプトメリア

九六年より實驗を開始し「エーエムヘリング」氏の補助に由り「リッエンタール」式滑走機を作りミンガン湖水の邊にて數百回の練習滑走を行ひ該式の不安定なることを知り而して其後一ヶ月にして「リッエンタール」式の慘死を聞き益々其の信念を深からしめたり其の後再三翼を有する滑走機を作り數回の試験を行へり此の機の翼は平面上にて前後左右に動き壓力中心の變化に伴ひ重心点を變ずることを得せしめたるものにして試乗を重ね經驗を積むに從ひ缺點を改良し遂に複葉式を製作し好成績を得たり之れ今日の複葉飛行機の標準となりしものにて氏は之を用ひて百餘回の滑走を行ひしも空の災禍を被らざりしは良好なる安定を意味するものなり

○昔支那に於て杉を封して王としたと云ふことが百家説林續編燕居雜話に載つて居るが「宋龍泉葉紹翁四聞見錄甲集云光堯幸徑山憇千萬木之陰願問僧曰日本何者爲王僧對曰大者王爲有杉小而直因封之」此の杉が日本の杉と同種であるか否かは知らぬが日本では事實に於て杉は林木の王である、眞直に

大きく生長する点から見ても材の利用の範圍の廣い点から見ても杉は確に日本材木の王であらねばならぬ

○本邦産樹木の内杉程横縦揃つて太くなる木は少からう、私の實際目にした越中高岡の七木杉は目通周約七寸釘さ二十余間あると云ふことであつた（本朝奇跡談に越中に大なる杉の名木有り十三尋廻ると云ふ珍敷大木なりとあるは此杉のことか）

○本多博士著大日本老樹銘木誌に載せられたものみでも目通周圍三寸以上の杉が九十餘本あつて高さは三十三間に達するもの有り又樹齡も二千年に及んで居るものが存する様である

○杉は其の蓄積の豊富で工藝上の諸性質が卓越して居る爲其の適用の範圍も極めて廣く大は建築橋梁船舶等より小は笹折箸類に至る迄又電柱土工用等の粗大なるものより寄木彫刻等の精巧なるものに至る迄或は化學工藝的に染料藥品等を製し用ひる所として可ならざるはなく且樹梢葉の末に至る迄夫々非常なる用途を有し全樹殆ど捨つる所なき状態である酒樽を製するが如き特殊用途に至つては全然他材を以て代用することを許さない

○如此利用の途が廣いので之が林業上の性質造林撫育法等もよく研究せられ官民共に造林樹種としては杉に最重きを置いて居る——一時赤枯病の爲に打撃を蒙つたが——而して一般社會の造林熱は段々と盛になつ

て行く、此んな風で進んで行つたら杉材は日本の最大なる財源の一ツとなるであらう

木村博士の研究によると

- (1) 杉材をアルコール及水に浸出して其の浸液からメチルアルコールを以て
  - (a) アルカリに依りて赤色を呈し空氣に依りて酸化され易く酸化すれば芳香性物質となる物質と
  - (b) 過酸化鐵溶液に依りて綠色を呈しアルカリに依りて赤色を呈せざる物質との二つを分離する前者は松の赤身に丈存在し他の針葉樹には存在しない
- (2) 清酒中よりワニリン様の芳香ある結晶を分離する
- (3) 更に硝子器中で酒を醸造するも飲料に適するものが出来ぬが之に松材を加へると香味共に飲料に適するものとなり且清酒中に松材より(a)に述べた特質と一半アルコール及タンニン様物質との溶出せることを發見した

○古來清酒醸造及貯藏用の桶樽等を松材を以て製作しつゝ、ある所以のものは松材を用ひなければ清酒が出来ないことを經驗に依りて知つて居るからである、要するに松がなければ清酒は出来ぬ清酒は杉材あるが爲に出来るのだ

○今此の清酒の原料は考へて見る迄もなく我々日本人の必須の食糧である所の米であ

る——同胞が殖民地へ移住しても之なくては土着が出来ぬと迄云はれて居る其程大事な米を措けもなくつぶして山吹色の水に變へ酔ふては大平樂を並へて居るが只さへ不足な糯米をこんなことに浪費する結果益不足を告げて一部の國民は臭い南京米を食はせられ貧弱なる身體の所有者となつて仕舞ふ

○アルコール飲料が身體に害があるかないかそんなことは論ぜぬとしても日に三度二度食膳に上せなければ濟されぬ其の主要なる食糧の不足する危険を多數の人々に抱かしむる一つの原因は確かに清酒醸造にあると思ふ、西洋にはビール、ウヰスキー、葡萄酒等有名なアルコール飲料があるが其等の原料たる大麦、玉蜀黍、葡萄等は彼等の常食であるパン（主原料小麦）とは大した關係はなく又其のパンさへも日本の飯の如く三度三度無ければ濟まされぬと云ふ程のものでないらしいので日本人に對する米とは到底比較にならぬ様である

○日本の人口は益増加するであらう其の増殖する日本の子孫には甘い米の飯丈は心配なしに食せたい此点からして僕は米から酒を醸ること丈は止めたいと思ふ

なめくちびが喜ぶ

菊池生

天候不順、七月に入つて殊に甚だしい、大風について大雨あり森林の被害も多い發電

所わきが山崩れし、當分寄宿舎に電燈のつくあてがない。水道管もつぶされた。毎日の雨で採集にも出られず、舎には脚氣患者續出の態、重症十名に及ぶ。只なめくちのみはぞろ／＼と垣根や椽の下を匍ひ廻る。喜ばし氣だ。

稻、桑は日にあたらぬ爲に生長が悪い。そしてある種の害虫の繁殖には好都合らしく被害の報頻々たり。最近に於て上水内郡の柏原村の桑園に多数の害虫發生新稍害をうけ下伊那郡神村の桑園には泥負虫繁殖して若葉を喰ひ荒らす、其他柿樹、桃樹の果樹の害虫夥しい。北佐久郡のクヌギ、ナラの潤葉樹にはクヌギアカツチ毛虫發生、嫩葉を蝕害してるとも云ふ。其他擧げて數ふべからず、本校の演習林苗圃に於ては目下調査中なれど去年より昆虫多き見込みなり、而して氣候不順と寒冷とが一般昆虫の生長發生に餘程の影響を與へて居るものらしくプランコ毛虫の如きも十日間餘りも蛹化遅れ去年七月十四日には羽化して盛に飛び交ひたるに本日十四日は其氣絶なし。

七月上旬へびとんぼを得た。頭部扁平にて蛇の頭に似體に觸れると翅をばた／＼して大口を開けて顎を出しかみつきさうにて氣持の悪い虫なり幼虫は黒川にも住む、刺して乾したるを孫太郎虫とて藥用にする所がある。

あけびこのは蛾の幼虫はあけびの害虫前翅が木の葉に似て擬態の好例だか此頃よくと

れる。

八日の晩。舎でくさかげろふが電燈の傘に卵を産みつけた。卵は俗に優曇華と云ふ。白色の卵を一つづ、四五分の細き柄の上につく。六つ程産みて止めたり、虫はルリ色の小さき眼と透明な五色に輝く薄翅の所有者で、幼虫も成虫と共にあぶら虫を食ふから益虫の仲間に入れられる。

毎年の事だが馬市以來遠に蠅多くなりたる心地す蚊は殆ど居られど蚤に攻められて眼らぬ夜もある。

雨は晴れさうもない、なめくちのみが喜ぶ

明け行く道 (つづき)

山田 恐ろしい奴にひつか、つたものだなわ

おしま これもみんな悪い夢とあきらめるより外にしかたがないのかしら

山田 夢といやあこの世の中のこととはみんな夢になつてしまふよ

おしま こんなことをいつたつてあなた本當にしてくれないだらうがわたしこちへ来てから毎日の様に今日逃げよかしら明日逃げよかしらとどれだけでもたへたかしの、あなたの御親切がしみ／＼思ひ出されて來るともうたまらなくなつてね

山田 その心が一年前に出て居たらなあ

おしま 二人共救はれて居たはね(間)そしてね逃げやうと思ふ度に涙をのんでじつとがまんしたの。うちの人はあれだし、さうして乾分はたぐさんあるしするんだもの、さうしてあの人たちは命じらずだものね、一時は逃られることが出來てもさうせつかまるにきまつて居る。すりやあなたにまで迷惑をかけずにはすまされなからわ

山田 恐ろしい世の中だなわ

おしま わたしが、もつと強い人間でしたら、どつくに死んで居るにちがひないけどわたしもう命なんぢつともおしくはないわ、だげんごさあ自分に死なうとなるとそれが出來ない因果な人間(間)それであなた何時朝鮮へ行くの

山田 今だよ。今が出がけだよ

おしま えそんなに急なの?

山田 今夜の十一時の夜行で行くんだ。俺の時計がくるつて居てね。實は停車場へさつき行つたのだがまだ小一時間もあつたから、それにあらへ行つたらもう當分は會へないと思ふと急に來たくなつたからなあ

おしま ではもうどうても會へないわね

山田 會社の用件で年に一度や二度は來るには來るだらうが、會ふ機會が得られるかどうかは疑問だ

おしま これが一生の別れかも知れない

山田 何そんなことがあるものか

おしま きつとよ、きつとよ、きつと一生のお別だわ

山田 馬鹿なことをいつてはいけない、そんな心細いことを考へないで氣を大きくもつて身體を丈夫にしてくれ、身體さへたつしやで居たらまた會ふときもきつとあると思ふ

おしま だめ だめ あ、あなたはいつてしまふじこ、の人からは毎日のやうにせめられるし、身體は日増しにげづられてゆくし(深い吐息をついて)から突然)あなた、あなた、いつつわたしをつれてつてちやうだい、わたしあなたが行くところならごんごんごへだつて行くわ 死んでもいいわ、一所なら山田ちつと女の顔を見て居たがやがて靜かに女の手をとりながら

山田 お前本當にそんなに思ふのか

おしま え、本當だとも 行くわ 行くわ

山田 本當に行くんだな

おしま ね、行くわ、ごへだつてゆくわ

山田 よし、それなら一所に行かう

おしま 行くわ、行くわ、さあ、さあ、人の來ないうちに早くつれてつてちやうだい、早く、早く、

山田 では、いそいで行かう

二人立上る暫し沈黙のうちにおしま

どうどう泣き崩れる

おしま あ、いけない、いけない、やつぱりわたしは行かれないわ、とてもあの遠い遠い朝鮮へなんぞどうしてゆかれませう、わたしは、わたしは、やつぱりこ、の人になぶり殺しにされますわそれが私の運命ならしかたがないさ

椅子に倒れかゝる

山田 (女をしつかり抱きながら)さうしたんだ、おいつかりしてくれなくては固るぢやないか(時計を見ながら)お、もう時間がない、早く行かなくつちや乗りおくれしてしまふ

おしま 山田の手をしつつかと握つて男の顔を上げ、とみつめる、涙が女の二つの頬を流れる

おしま 山田さん、わたしもう何もかもあきらめますわ、わたしは、わたしは、い、から早く出かけてちやうだい、私のために乗りおくれでもしたらわたしがおすまないわ

山田 實際こまるな、い、かい(時間を見ながら)あ、もういけない、ぢやあ失敬するよ。

山田出かけやうとする、おしまどりすがつて泣く

おしま お、山田さん、さようなら、本當に、本當にさようなら

おしま おしま倒れる、山田おしまを抱かうとしたが氣をとりなほして

山田 お、さやうなら

山田 急ぎ足に去る

おしま ウキスキーをあふる

おしま あ、どう／＼行つてしまつた、山田さんも行つてしまつた

泣き崩れる

勘太 嗚呼せききつて飛んで來る

勘太 お、姉つこ、どう／＼いつちやつた

おしま え、誰が行つたの

勘太 お、行つちやつたよ、行つちやつたよ

おしま だから、誰が行つたといふんだ

勘太 親分がいつちやつたよ

おしま え、うちの人が?、してごへ行つたといふんだよ

勘太 わからぬな、あ、けけ察へひつばられてしまつたよ

おしま 何?警察へ?うちの人が?、どこかで場でもわれたと言ふのか?

勘太 さうでない、よくはわからぬが何でも去年だつたか、誤つて人殺をしたのをうまく金でごまかして、おいたのださうだが、そいつがどう／＼わかつたらしい、何にしてても俺や、これから野郎共の所へつて來なくちやならぬえから、おい姉つこ、後をたのむよ

勘太 飛び去る

おしま、わい勘太、勘太

戸口までよるめいて行つたがまたもどつて来て、いつそのこと(間)あつた山田さんの後をおつかけてつれていつていた、かう、お、さうだ

立上つてとき流笛の音がする

おしま あ、流車が、流車が、もう出てしまつたのか、山田さんもう行く行つてしまつたのか

ウキスキーを飲みほして空瓶を床になげつける大きな響がしてられる

おしま あ、頭が、いたい、わいさうだ、ああ、ああ……

立上つたはだしのま、戸をあけて出やうとする、おさく歸つて来て戸口のどこでばつたり出合ふ

おさく お、姉さん、姉さん、姉さん、きつろうかへてどこへ行くの、お、姉さん、姉さん、姉さん……

それには返事もしないで、どめるおさくをはねのけておしま出て行つてしまふ

おさく 姉さん、姉さん、姉さん……

そこへ泣き伏す泣聲のうちに静かに幕

關西旅行の記(つづき)

第三日 朝五時我國で有名な松林を視察すべく吉野方面へ向ふ吉野驛にて流車をすてた我々は四里程の道を沿道の名所舊蹟を探りほとりの森林を眺めつ、疲れた足を引き

づつた藏王堂の前に立つては過ぎざりし古き昔を思ひ出さずには置けなかつた又使用せられた材の大なるには驚いた有名なる吉野の櫻も其の花なきは甚だ遺憾とする所であつた果て知れぬ杉林の中を續く蜿蜒たる道は随分嫌になつた遂に川上村大瀧に至り吉野河岸の松榮横に宿を求めた宿下の川には流材の筏に組んだものが川一杯と云ふ程止まつて居た自分は一人の友と筏に付いて調べた夜は晝の疲れに何時か夢路にさまよふて居た次に本日見聞した林業の事項を述べ様

一、道すがらの二十三年生以下の杉林は雪倒れの害を防ぐ爲め繩を以て互に林木をつなぎ合つてあつた此の廣き森林に斯く迄管理の周到なるに感心した又間伐を初めて居た

二、直径八寸位の杉の切株の年輪を調べて見た其の株は二十三年の年輪を持つて居る

三、川上村附近の杉林は多く和歌山市に送り再び大坂方面へ輸送するとの事だ

四、和歌山方面への運材の方法は全く筏運材にして大瀧より下流は上流より運び來つた筏(此の地にては細筏といふ)を二枚を以つて一枚どし之を七つ八つ連結して流すのである其の材積は材の大小によりて異なり普通の材は(直径七八寸乃至一尺位)百尺内外にて大材なる時は百五十尺位にて之に要する人夫は河の水量

によりて一定せずと雖も適當なる水量なる時は二人位である次に樽丸と稱し(桶材とし又流車の辨當箱の原料とす)長さ二尺五寸にしたる厚板材を長さ六尺の繩にて束ねたる物があつた之は吉野特産であるとして此の吉野川に於ては一間材は決して流運しない

右の様に見聞した

第四日 昨日とは違つた道を取つて大瀧を後にした途中上市工業學校を見たが大瀧に感じた所はなつたか只生徒の手によつてなつた玩具には多く朴の木が使用してある様に思つた次に我が校と親しき奈良農林學校を訪れた道を同じくする林科の生徒は我々を非常に歓迎してくれた彼校の苗圃標本室等見學の後林科生徒に見送られて農林學校を辭した我々は再び流車に乗せて高野口に至つた時は日正に没せんとする頃だつた一天はどんより重く明日の天候があやぶまれた宿の冷遇には心婚しくなかつた

第五日 「起きた」の先生の聲に夢を破られ起き出でて見れば雨蕭々今日の高野登山も甚だ心が進まなかつた三十五錢の合羽二枚に身を包み行く我々のスタイルも一寸一風あつた雨は小止みなく降り續けるいま先上りの大道を急ぐのも余り樂ではなかつた谷間に立ち込めた霧は遂に霽れず高名い國有林も一瞬の裏に納める事が出来ずインクラインも丁度運轉して居なかつたので只其の構造を見たのみに過ぎなかつたので殘

われらがたびち(續)

白 虹 生

念だつた途中より軌道に浴ふて登つた合羽を通し上衣を通りシャツ迄も濡れてしまつた其の頃には泣き度くなる位厭だつた頂上に至り立ち並ぶ寺々に接しては弘法大師石童丸等を思ひ起さすにはおけなかつたけれ共僕には余り感じた事はなかつた下山の早さは又格別先行く人を追越へ追越へ僅か二時間半にして高野口に達した直ちに大阪に向ふ夕食後は晝間の疲勞の爲め前後も知らず寝入込んだ

第六日 今日には幸ひ好天気午前中大阪城跡に今昔を比較しながら上つた眼下に見える煙突は林の様其の吐き出す黒煙は濛々として空を被ひ太陽の顔すら見る事が出来ない次は造幣局に行つた規模が大きいので余り細密に知る事は出来なかつたが金銀貨を車にてのせて運んで居るなど見た時は此處には不景氣なんて語は不必要だとも思つた然し不潔な空気を吸つて居る人夫の青醒めた意氣地のなさうな姿は、青い木の下に清い、空気を吸つて將來活動の出来る自分等の如何に幸福であるかを思はしめた後は自由行動であつた僕はY先生に伴なつて四條驛神社に参拜した小楠公墓前の石門に掘り付けた忠孝の二字と墓側の樟の老樹は遠き昔を遺憾なく語つて居た今後幾百幾千年の末迄も此の字と此の樹は朽ちる事がないだらう直ちに足を返して京都に着せし頃は夕靄が蒼然として東山を包む頃だつた

第三日 枕邊を走る電車の音に淺き夢を破られたる我等は宿屋の男の江戸兒育ちのキビくした待遇を受けて、朝ばらより都會の風習に呆れた。上野驛より省線電車に投じて東京市の郊外を西に南にと走つた。代々木にて下車し幾千万か數知れぬ樹木に挟まれたる廣道を通ること久しくして、白木の大鳥居を過ぎ聖帝の御魂を拜す。神苑の大なる樹木が移植に成功して居るのに驚いた。神苑を出て、青山練兵場を貫通して右曲左折の後農科大學に至り先輩諸兄の方に面會し、此處にて晝飯を済して、苗圃を一巡して、林産製造實驗場、森林化學實驗室及び林業標本室等を巡覽し、別を告げてオリンピック競技場を右に歩んだ。電車中にて腰足の疲れを伸して間もなく目黒に至り、林業試驗場内を一覽して後解散し、自由行動を取る。我等は泉岳寺より淺草に廻りて、晩まで痛快な行動を取り、散々に宿に歸り失敗談に花を咲かせて寝た

第四日 自由行動の日——我等は友人或は親戚の人に連立つて、上野より九段、青山芝、日比谷、丸の内、銀座、淺草等の方面を廻つて、主なる物を見物した。

第五日 我等の山間を出で、遙に帝都に上り、其の愉快なる境遇を憶れつ、早三日間、實に奇々妙々の中に過ぎて、今將に此

地を辭さんとす。今暫しどの未練も車中の身となりし後は、自ら去つて、潤んだ流笛の音は一聲高く上野驛を離れ、刻一刻と都を遠ざかつて、關東平野の青波濤かななる中を北に走つた。一面廣漠として變化少き景に漸く飽き來たる時に、何時しか糸の如き雨に車窓は濡ひてボーと曇り、外景定かならざる中に約四分の時過ぎ、中仙道主要驛にして埼玉縣廳の所在地なる浦和を過ぎ間もなく、大宮驛の大規模なる構内を通り抜けて、益々降り繁る雨の下を栃木縣に入り、宇都宮にて分岐して、日光線を進む、雨少時晴れて次驛鶴田に入る三四十秒前に廣大なる杉及び檜の苗圃を左窓に望んだ、此の附近桐の林レーンに沿ひて長く續いた。右窓の路上には宇都宮聯隊の練兵場の狀況を望んだ。赤松、檜の混雑林左窓を賑はし愈々山地に入り來る如め心地した。日光驛に降りて直ちに驛前より、到底東京の電車と比較出来ないブーンな電車一臺に滿載されて東照宮に至り、案内者に従ひて境内の壯觀優美なる建物を巡覽するに、唯嗟然として、少時は無言であつた。三十分毎に發着する電車に間に合ふ爲道を過ぎ坂を降りて之に乗じ終点馬返より徒歩にて新道約一里半の山道を登つた。途中方等龍般若瀧を右に臨みたるのみ、霞益々濃厚となりし爲華嚴瀧は見る事が出来なかつた。中禪寺湖畔の萬屋に投宿。次はクレス會を開催して、鬱氣を晴し大いに元氣を鼓舞した

念だつた途中より軌道に浴ふて登つた合羽を通し上衣を通りシャツ迄も濡れてしまつた其の頃には泣き度くなる位厭だつた頂上に至り立ち並ぶ寺々に接しては弘法大師石童丸等を思ひ起さすにはおけなかつたけれ共僕には余り感じた事はなかつた下山の早さは又格別先行く人を追越へ追越へ僅か二時間半にして高野口に達した直ちに大阪に向ふ夕食後は晝間の疲勞の爲め前後も知らず寝入込んだ

第六日 今日には幸ひ好天気午前中大阪城跡に今昔を比較しながら上つた眼下に見える煙突は林の様其の吐き出す黒煙は濛々として空を被ひ太陽の顔すら見る事が出来ない次は造幣局に行つた規模が大きいので余り細密に知る事は出来なかつたが金銀貨を車にてのせて運んで居るなど見た時は此處には不景氣なんて語は不必要だとも思つた然し不潔な空気を吸つて居る人夫の青醒めた意氣地のなさうな姿は、青い木の下に清い、空気を吸つて將來活動の出来る自分等の如何に幸福であるかを思はしめた後は自由行動であつた僕はY先生に伴なつて四條驛神社に参拜した小楠公墓前の石門に掘り付けた忠孝の二字と墓側の樟の老樹は遠き昔を遺憾なく語つて居た今後幾百幾千年の末迄も此の字と此の樹は朽ちる事がないだらう直ちに足を返して京都に着せし頃は夕靄が蒼然として東山を包む頃だつた

(續)

縣内旅行の記 一年生

五月五日

我等一年生は修學旅行の途に就くべく五日の未明福島驛庭に集合し、午前六時七分福島を發し宮越に下車し伊那に行くべく權兵時へと向つた、春の女神に祝福されることの遅いこの木曾谷の春ももう大分老いて、青葉若葉の薫る山には山吹の黄、桃の花の紅が美しい色彩を見せて居た、次第に山路を登るにつれて今迄寒さを感じて居た肌には汗を覺える様になつて來た、道々茶目を發揮しつゝ、登つてゆく、影響の空も大方青空に變つて姥神時に着いた頃は全く晴れ渡つて遙かに白皚々たる御嶽の雄姿を望んで一息ついた時には玉の様な汗が額を流れて居た、一行の中には持つて來た握り飯をもう此處でばくつき初めたのもあつた、一息ついた我等は一層の勇を鼓して頂上に至るべく發した、この邊道の兩側には薄紫のヌミレの花がしほらしく咲きみだれて居た。彼の漂泊の詩人芭蕉の「山路來て何やらゆかじすみれ草」の句がしきりに思ひ出され「甘い懐舊の感かしきりに催された、だんだん途がけはしくなるにつれ一行の元氣も幾分衰へたと見えて歌の聲も低く少くなつて行つた、木蔭に汗を拭ひ清水に喉を濕ぼすこと數回にして漸く權兵時の頂上へと辿り着いた、時に午前十時十分前、頂上には消え残りの雪が澤山積つて居る、我れ先

きに雪のお握りをこしらへて渴を慰やした、眼下に展開された伊那の天地を望みながら持參の握り飯に舌鼓を打つすつかり荷も軽くしてしまつた、此處で約一時間休憩し、伊那の農學校へ行つたら、擊劍の練習試合を申し込んで見やうと云ふことを約して時を下り初めた、時の頂きですつかり腹をこしらへたので元氣を恢復し頗る旺盛なる意氣を以て伊那町指して急いだ、伊那町近い赤松林の道に至つた時には直ぐ眼の先きに町が見ゆながらもなかなか林が盡きないので全くうんざりさせられてしまつた農學校に着いたのは丁度午後の二時であつた校舎は最近火災に罹つて後新築したばかりであつたので未だ木の香りが新しく頗る現想的の建築であつた、案内されて理化教室、教室、標本室、寄宿舎等を參觀したが種々の標本や設備は焼失の後未だ備はらない由にて極めてプーンであつたのは遺憾だつた、農園は約五町歩ある由にてそれを生徒各自の分擔と共同に分ちて實習をなし、實習は我々と同じく終日實習、午後實習、放課後實習の三種にてその中終日實習は一年間に約十日の事であつた、參觀を終つて後新築の雨天体操場にて親切なる茶菓の饗應を受け、それから我々の玉君、〇君、M君等が農學校選手と擊劍の練習試合をなし、有志數名の諸君は校庭に於て矢張り農學校の諸君と庭球の練習をやつた、厚くその厚意を謝して此處を辭したのは五時

近く、あたりの山々には夕靄が淡く閉ぢこめて居た、旅館箕輪屋に着いて一行が旅装を解き初めた時今迄怪しかつた空からはぼつりぼつりと雨が見舞つて來た、夕飯を終へた頃はもう夕立の様によく降りじきつて居た、外飯を済ましてから我等一年生は入學以來第一回のクラス會を宿の階上の廣間に開いた、南澤先生、藏尾先生のクラス會對する御希望があり、會員各自の意見の交換協議などが行はれて拍手は急激のごとくそれからうれへと續いた、會の中は頃元我々の國漢文の先生であつたと云ふ佐藤先生が臨席せられ西澤先生の御紹介にて所感を述べられた、歡を盡して會を閉ぢ、明日の天氣を氣づかいながら床に就いたのは十時少し道ぐる頃であつた。

五月六日

夜明ければ夜來の雨猶降り續いて天候宜しからず朝食を終へて下駄買ひに出かける事忙しい。

新下駄を履き一本の傘中に二人三人と打ち入りて電車停留所に至り午前六時三十分の臨時電車にて雨中辰野に向ふ。

辰野に着くや直に嵐車へと乗り換へ捕尻に至り下車す、未だ雨霽れず例の如く傘にて捕尻農學校に至る、一先づ休憩す稍ありて農學校にて我等の爲に歓迎の意を表すべき煎餅に我々一同こぞつて鼓をうつ

一時間餘りも休憩するや農場の見學にうつる。折しも風さへ加り猛雨斜に飛ぶ中を此

處彼處と參觀す、果樹の手入頗る行届いて居た。農場の見學終れば今度は縣設苗圃へと向つた、幸なる哉雨は追々と霽れ來る。本校卒業生たる樋口森林主事に案内されて縣設苗圃、松本小林區、民間苗圃を視察す

折にふれて

篋

○母駒の後をすたすた慕ひ行く鬘揺りて子馬よろしも

○五月雨に駒曳き急ぐ群過ぎぬ市場の騷遠く聞ゆる

○日曜を山に弟と飯を食ひ前をくちなは蜂を追ひ行く

○雨降れば勢こむる如くにて苗すれすれに飛べる燕の

○窓に立ちあしたの空氣食れば駒の嘶き人のけはひは

○五月雨に潮音高むる木曾川の通ふ枕に眠る夜な夜な

○朝小雨教員方が窓によりうらめしげには駒ヶ根望む

○さきそめて望の花や幸の草生の小川に生の泉に

○濃かに木曾川堤若葉して新なる日の新なる岸へ

○呪ひある世には生れて呪ひある身ながら生くる人の冷たさ

○山の上に紫きらふ紅うれし親しみ覺え太陽昇る

○あがきらふ人にさりなくいらへして日に日を過すことさぶしも  
○山ならば山とても云はん川ならば川とも言はん人の心の  
○薄給の悲しさあふれ酒呑みに出で行く門を夕さまよふ

夕のかなしみ

エス生

若し

捨てられたのじや

ないかしら

佗しい

心で

たそがれの

空を見つめて

居ましたら

捨てられた

獨手に湧く

かなしみに

熱い

涙が

ホロホロ……

ホロホロ……

頬を

つたふて

ホチボナ……

ホチボナ……

友への叫び

今野生

今日は日曜です。公園を散策するに十分夏の氣分が漲つて居るのに氣がつかます。日は出やう／＼と思つて居ても忙しい都に住んで居つてはさうも疎遠になりがちで、友に對して誠に濟まないと思つて居ます。飯食ふ時間が省けたらどんなによからうと思ふ事さへあります、仕方がない電車の中でもよいから思ひ出しては「友よ健在なれ」と祈る事があります。

静かにして濃かな木曾の初夏を思ひ出します。古鏡の如き清冽な黒川の水面に映る山吹——銀片の如く水底に光る河魚——校庭に飛ぶボールの音。晝のやうに眼前に勢鬚します。寄宿の窓より駒ヶ嶽の嶺の日々に消え行く眺めて、暑中休暇を指折りて數へらる、諸兄。私も其の時の事を回想して深い感じがあります。そして其の時の友は今や西に東に散つてオ、顔を合はせる事が出来ないので。

ただ此の林友によつて互に友の心と心がすべてに通じ合ふのだと思つた時、私は自分の隠微の心を制して無事にペンを持ちました。たとへ我等の過去がどうであつても、我等が三年間蘇校に學んだ事は、重大な意義があるのであつて同時に恩師同窓とも少しばかりの縁ではなかつたらうと思ふ。母校を愛する心、同窓と思ふ心は其の學校をして眞に榮ある學校たらしむる道と信じます。

どんな人が來て講演して呉れてもどんな團

体が出来ても其の學校の消長するのは、其の學校の内的努力に依るのであつて、何等の價值が無い事と思ひます。換言すれば其の講演の主題が徹底するのも或種の團體が消長するのも、講演者及團體の主題如何に依るのではなくして學校を自ら身を最も明白に語るものと思はれます。あ、其の内的努力だ眞に身を犠牲にしても行るといふ強者がなければならぬ。先生に！生徒に！何れでもよい。其の學校の盛衰如何は犠牲者の有無如何だ。先生生徒小使誰でもかまはぬ。犠牲者の有無如何はあなたが起つたぬかによるのですよ。我はたゞ遠く祈禱とペンとを以つて敬せん。

斯く云ふ私も時々自己の貧弱に泣く事があります。泣くと同時に私の淺黄の勞働服の下に向上の焔が燃えてきます。私は肉体的に職工と同様にすら働けない。智識などはまだ級外だらうと思つて居ます。道徳的信念のある人は青年時代に於ける、幸福者！殆ど表面のみ。道徳の事なども體驗しなくてはほんどうに弱いものです。でもいさ、かでも自己を知り根底のある道徳的者といひたいです。道徳を第二義的に解釋する人は私は例令何があつても不幸者といひたいです。道徳は人爲云云する人は良心が或場合勝てなかつたからうに起因する良

心の鋭い然し乍ら弱者の聲だらうと思ひます。我國は過去五十年に於て餘りに現實的な道徳のみで(淺薄な忠孝論)教育して來ただから今に於て雨後の筈のやうに疑獄が續出する。自己を知つた信仰的道德で築きあげねばならぬと思ふ。私が第一は母校に望む事は信仰道德的學校の完成だ。其の完成は修養團支部の活動に依るのではなくして先づ辯論部から雜誌部から舎生會から室長會議から二年會から通學會からにしたい。それが各自の謙虚なる真面目な内的要求に起因するのだ。生徒の内的要求は教師の絶えざる内的要求に赤因するや言を待たない第二義的の講義は却つて生徒を害する。君よ起て！其の結果がどうならうとも君の眞から叫びであり奮闘であるならば、それが人生の眞の尊い叫びだらうと思ふ。教師だらうと在校生だらうと卒業生たることを問はない。W君が朝鮮にI君が臺灣にC君が樺太へ、あ、我等の同級生も散兵線を張つた。實戦だ成功を祈る。一〇・六・二六

長野縣木曾山林學校創立  
記念會記念事業募金申込  
報告書

(第六回報告申込順)

大正十年七月廿三日印刷  
大正十年七月廿五日發行

長野縣西筑摩郡福島町四〇四番地  
編輯兼發行人 安井正夫  
長野縣西筑摩郡福島町三八九番地  
發行所 廣澤書店

長野縣松本市小柳町八十五番地  
印刷所 長野縣松本市小柳町八十五番地  
印刷所 廣澤書店

【定價金參錢】

- 島内先生謝恩金領收報告
- 金貳圓 古畑今朝茂殿
  - 金參圓 都竹武次郎殿
  - 合計金五圓也
  - 累計金壹百四拾參圓六拾錢也

會員動靜

- 宮下 武夫君 岐阜縣益田郡小坂町帝林局小坂出張所伐木掛として轉任
- 内田新之助君 福島縣郡麻郡檜村喜多方小林區保護區官舎に轉せらる
- 日野 櫻亮君 北海道札幌區北一條西四丁目木下信方に轉居
- 阿部益實君 長野縣下伊那郡飯田市外羽根垣外に轉住
- 深澤佐愛君 山梨縣林務課甲府分擔區に轉任せり
- 多田慶次郎君 静岡縣天城帝林局出張猫越分擔區に轉任せらる